

図書館だより 第33号



春休みに八尾図書館ほんの森で行った「夕べのおはなし会」の様子です。
「おはなしのろうそく」をともし、絵本の読み聞かせやおはなしを楽しみました。

目 次

先進図書館見学記 岡崎市立図書館	2
平成 21 年度主要事業について	4
いちおしライブラリー 第 21 回 「食」について考えよう.....	5
岩倉政治文庫の資料 7	7
レファレンスあれこれ	8

先進図書館見学記 岡崎市立図書館

1. 図書館の概要

愛知県の東海地方の中核都市である岡崎市に、平成20年11月に新しい中央図書館が開館しました。

昭和46年に建てられた旧図書館は、資料の収集・保管スペースがなくなったこと、館内が暗く利用しにくい、駐車場が狭いなど市民からの不満もあり、中心市街地再活性化のひとつとして建設されたものです。

新図書館は、岡崎城の城郭跡地に建設された『岡崎市図書館交流プラザ りぶら』の1階・2階部分に入っています。この施設は、中央図書館を中核とし、市民活動総合支援センター、演奏会やパーティもできるホール、ジャズコレクション展示室、歴史資料展示室などを含む地上3階建てとなっています。

『りぶら』とは、「図書館」を意味する「Library」と「自由」を意味する「Liberty」を組み合わせた造語で“明るく希望のあるイメージ”を表しているそうです。

施設の中には、岡崎城の外堀をイメージした「お城通り」「お堀通り」と称した広い通路がゆるいカーブを描いて走り、各空間を結んでいます。広々とした通りにあるテラスでは、のんびり本を読んだり、談笑する市民の姿がありました。



1階図書館入り口

2. 図書館の特徴

(1) 利用者の目的を考えた館内フロア

1階部分は、レファレンスライブラリー。地域資料、辞典類の参考資料のほか、調べものに使え、貸出可能な資料が揃っています。インターネット等を利用した情報検索・電子情報等が入手できるインターネット利用席や調査研究のための研究個室やグループ室もあります。

2階のポピュラーライブラリーは、生活に身近な資料をテーマ別にまとめた書架となっています。新聞や雑誌のあるブラウジングコーナーやCD・DVDを揃えた視聴覚コーナーのほか、ティーンズコーナー、外国語資料コーナー、グループ室、閲覧室などがあります。

通路をはさんだ向かいには子ども図書室があり、ベビーカーを押したお母さんや子どもたちで賑わっていました。



1階レファレンス・カウンター

(2) 最新の技術を導入した情報拠点としての機能

図書1冊ごとにICチップを内蔵したタグを貼付することにより蔵書管理を行っています。自動貸出機による貸出、自動返却仕分機では返却口へ図書を投入すると返却処理と仕分け処理を同時に行うことができるなど、貸出・返却作業が早くなっています。

また、館内に設置してある端末では、蔵書検索や図書利用カードを使っての蔵書の予約や視聴覚ブース、研究個室等の予約・インターネット席利用の時間予約等が簡単にできるシステムを採用しています。



視聴覚ブース・インターネット席
の予約端末

(3)蓄積された資料の収集や保管

1階レファレンスライブラリーにある家康文庫では、徳川家康と三河武士に関して全国の市史類から時代小説まで集めてあります。これらの資料は、職員が依頼をしたり、直接神田神保町へ出かけて収集したものだそうです。

また、岡崎に関する小冊子やパンフレット・リーフレットの類は、ちらし1枚でも漏らさず収集し、一つ一つ封筒に入れて分類・保存してあります。

(4)市民との協働

『りぶら』は、市の中心部に人を集めたいという行政側の思いと、「まちの縁側」として気軽に集まれる場所が欲しい市民の願いから生まれました。

旧図書館時代から図書館ボランティアの活動を行っていた「おかざき図書館倶楽部」を中心に、市民参加型ワークショップを開催し、行政と市民が意見を出し合い進めてきたそうです。



1階閲覧書架

(5)その他

図書館内は、前面ガラス張りで窓から明るい光が入り、館内は広々としており、ゆったりとくつろげるスペースとなっています。

1階は白色の書架に床は黒いじゅうたん、2階は黒色の書架に床は明るい茶色のフローリングと一目でわかるように区別されています。壁面は白色で統一してあり、全体が明るく清潔な印象を受けます。書架の近くにはちょっと気軽に休める椅子がたくさん配置してあり、床暖房設備、携帯電話ブースの設置など利用者にやさしく配慮してあります。

また、施設全体としては、雨水利用や太陽光パネル設置など省エネルギー・新エネルギーを考慮したつくりとなっています。



2階子ども図書室

3.基礎データ

奉仕人口	370,000人
複単別	複合施設
延床面積	約8,000㎡
蔵書数	約60万冊
収蔵可能資料数	約100万冊
新聞	50紙
雑誌	500誌
開架閲覧席	約700席
インターネット席	20席
オンラインデータベース	15種類
駐車場 (図書館交流プラザと共有)	300台

平成21年度主要事業について

地域館・分館の開館日見直し

平成 19 年 4 月から図書館本館については月曜日・祝日・休日も開館し通年開館としましたが、平成 21 年 4 月からは地域館・分館の開館日・開館時間も拡充します。具体的には次表のようになります。

館名	開館日・開館時間	休館日
本館	月～金 (4～10月) 930～1900 但し、青少年図書室は18時まで 月～金 (11～3月) 930～1800 土・日・祝休日 930～1700	12月29日～1月4日 蔵書点検 館内整理休館日 (第1木曜日)
大沢野図書館	月～金 930～1800	
大山図書館	土・日・祝休日 930～1700	
婦中図書館		
八尾ほんの森	月～金 930～1900 土・日・祝休日 930～1700	
山田図書館	月～金 930～1730	
細入図書館	土・日・祝休日 930～1700	月曜日 12月29日～1月4日 蔵書点検 館内整理休館日 (第1木曜日)
富山地区15分館	火～金 900～1700	
八尾福島分館	土・日・祝休日 900～1700	
八尾東町分館	火～金 900～1800 土・日・祝休日 900～1700	3月・12月以外の 第3火曜日 2月の第3水曜日 12月29日～1月3日
とやま駅南図書館	月～金、土・日・祝休日 1000～2100	

子ども読書活動推進計画(第二次)の策定

平成 16 年 10 月、「富山市子ども読書活動推進計画」を策定しましたが、国の「第二次子ども読書活動の推進に関する計画」を受けて、子どもが本と親しめるよう読書環境の整備を進めるため「第二次富山市子ども読書活動推進計画」を策定します。

細入図書館新庁舎への移設

現在細入教育行政センター内にある細入図書館を^{にれはら}榆原中学校図書館・^{みどり}神通碧小学校図書館と細入図書館を統合して、同校内に、平成 22 年 1 月ころ移設オープンします。

堀川分館新庁舎への移設

堀川地区センターの移転新築に伴い、図書館堀川分館を堀川地区センターの新しい建物内に移設します。オープンは平成 21 年 5 月の予定です。

いちおしライブラリー 第21回 「食」について考えよう

近年、食品偽装事件、危険物質混入など、食の安全をゆるがすような事件が相次いで発覚し、連日のようにメディアで取り上げられていました。そうした中で関連する本も多く出版され、図書館でも食の問題をテーマとした展示をいくつかの館で行いました。そこで今回は、昨年出版された食に関する本の中から、何冊かをご紹介します。一時期のようにメディアで騒がれることは少なくなりましたが、「喉元過ぎれば…」とならぬよう、今こそ「食」についてじっくりと見つめ直してみませんか。

<「食」の問題とは>

食の安全・安心を脅かすような事件が頻発する背景には、どのような問題があるのでしょうか。食を取り巻く根本的な問題を知るための2冊をご紹介します。



『食料植民地ニッポン』

青沼陽一郎 / 著

(小学館 2008)

「食料自給率39%」という数字と「日本人はわがままだ」ということが、この本の中では繰り返し強調されます。白ゴマに黒ゴマが一粒混ざっただけで、日本ではクレームとなるそうです。異常なまでの注文の細かさの割に、安く買い叩く日本。世界の食料事情が変わってきた近年では、細かい注文をつけず、もっと高く買い取る外国に買い負けることが増えてきました。

「輸入食品は怖い」という漠然とした被害者意識しかなかった私ですが、「安さ」「おいしさ」「見た目の良さ」「安全」など、すべてに完璧さを求めすぎだったようです。文句をつける前に、自分の意識から変えていかねばならないと感じました。



『食大乱の時代』

大野和興、西沢江美子 / 著

(七つ森書館 2008)

この本は、「貧困」をキーワードに食の問題を読み解いています。食のグローバル化が進む中、作れば作るほど赤字という悲惨な状況が、日本の農家やアジアの農村で起きています。また、名ばかり店長問題など、外食産業などにおいて劣悪な労働条件で働く人々の問題もあります。その一方で、巨額の利益をあげる食品関連企業やアグリビジネスがあるというのが現在の状況です。

多くの部分で『食料植民地ニッポン』と同じ問題を扱いながら、それらに対する見解は当然ながら異なる点も見られます。読み比べることで、私たちが食の問題を見直す手がかりとなるのではないのでしょうか。

<賢い消費者になろう>

憶測や噂も含めて、様々な情報が飛びかっています。いったい何が安全で何が危険なのでしょう。情報を正しく見極め、賢い消費者になりたいですね。

『食品の迷信』 芳川充 / 著

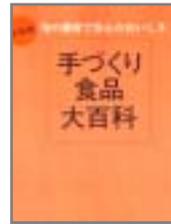
(ポプラ社 2008)



輸入食品や食品添加物、農薬は危険といった報道が目立ちますが、筆者は食品流通に携わってきた立場から、「食品は十分安全」と反論します。日本の輸入検査基準の厳しさ、中国や東南アジアの近代的で衛生的な工場、「国産」「天然」が安全でおいしいとは限らないことなど、なるほどと思わされます。そして、誇張や間違いが多かった食品報道を批判し、その裏で儲けた「恐怖商法」の存在にも触れています。メディアに踊らされることなく、落ち着いて考え、自分の頭で判断したいものです。



『高いわけ、安いわけ』
NACS 東日本支部食部会 / 編著
(大月書店 2008)



『手づくり食品大百科』
家の光協会 / 編
(家の光協会 2008)

食品を選ぶさいに一つの手がかりとなるのが、食品表示。偽装表示が相次ぎ、残念ながら完全に信用できるとはいえない状況ですが、見方を知っておいて損はありません。生鮮食料品、調味料、飲料、加工品と59品目を取り上げ、それぞれ見開き2ページで、左ページに実際の食品表示、右ページに価格差の理由と上手な選び方、使い方を載せています。

ただこの本のあとがきにもあるように、まずは自分の目、鼻、手触りを十分に使って選ぶという意識が、一番大切なのかもしれません。

<安心でおいしい食を>

食の危機が叫ばれる中、手作りの良さが見直され、地産地消がブームとなっています。

『冷蔵庫で食品を腐らせない日本人』

魚柄仁之助 / 著
(大和書房 2008)



『冷蔵庫で食品を腐らす日本人』(朝日新書、2007)の著者が、「だったら食品を腐らせない技術も書いて欲しい」との読者の声に応えて出した本です。基本的な「10の掟」に始まり、干す、漬けるなどの様々な賞味期限延長術を、食品ごとに紹介しています。今のところ私が実践できたのは、掟10「使ったものはその場で即洗う」だけですが、やるやらないは別として、イラストも多く、フムフムと読んでいるだけでも楽しい本です。

冷凍餃子中毒事件の後、手作り餃子が流行ったそうです。漬物、干物、果実酒、ジャム、味噌、ハム、チーズ、ソース、和菓子など、普段は市販品で済ませてしまいがちな食品の作り方が満載です。約200レシピ、271ページという分厚さは、まさに「大百科」の名にふさわしいでしょう。



『富山なぞ食探検』
読売新聞富山支局 / 編
(桂書房 2008)

読売新聞富山版の連載が書籍化されたものです。まずずしの表紙が印象的なこの本、県内の書店で目にした方も多いのでは？

昔懐かしい伝統食から、目下開発中の富山ブランドまで、春夏秋冬に分けて富山の様々な食が紹介されています。おいしそうなるカラー写真も多く掲載されており、読んでみると実際に食べたくなってきました。食の宝庫富山では、ずいぶん豪華な地産地消ができそうですね。食べ物の写真に負けず劣らず素敵なのが、食に関わる人たちの表情。私も探検隊の一員となり、たずねていきたくくなりました。

私の一番の思い出の味は、「あんばやし」。子どもの頃、お祭りに行くと必ず食べていました。そんなあんばやしは全国区ではないと知り、驚きました。みなさんの思い出の味は何でしょうか？一家に一冊、目に付くところに置いておけば、家族団欒のきっかけになるかもしれません。

(本館・館内奉仕係 海野)

岩倉政治文庫の資料 7

『生きる限り』(「生くる限り」改題)単行本(左)と『真宗聖典』(右)



作家活動の初期において、「稲熱病」や「村長日記」など、農村の現実を描いた作品が高い評価を得た岩倉でしたが、その小説にかける情熱は、農村という一つの舞台にとどまりませんでした。社会の様々な場所に目を転じ、その中で生きる人間の姿を描き出すことによって、「実生活のなかに息づいている宗教」をも探ろうとする試みを始めます。

その一つが、昭和16年に発表された短編小説「生きる限り」です。ここでは、監獄という特殊な場所を舞台に、死刑囚と教諭師の交流をとおして、信仰とは何か、救済とは何か、という命題に取り組んでいます。

死刑囚・大井は、悪徳商人・久蔵を殺害した罪で、刑の執行を待つ身です。正義感に燃え、かつ無宗教を信条としていた大井は、逮捕当初、「国家社会のため、正義のために、あのような極悪商人を成敗してなにかが悪い」とばかりに強気にたち、世論も自分に味方しているものと信じきっていました。そのため、大井を諭しに来た浄土真宗の教諭師・富士木を、「自分には必要ない」と一度は追い返します。

ところが、いざ公判に臨んでみると、人々は自分を殺人鬼呼ばわりし、死刑にしると叫んでいることを知って、愕然とするのです。自分の罪の重さ、極刑を免れない運命に気づいた大井は、ついに富士木に救いを求めます。そして富士木の導きにより、大井は自らの行いを悔い、残された人生を仏教に捧げる決心をします。

人が変わったように、熱心な仏教信者となった大井ですが、それでも一度は周囲の悪罵に耐えかねて、自暴自棄になり、公判で罪を他人に押し付けるような証言をしてしまいます。しかし、すぐに己の過ちに気付いた大井は、涙ながらに富士木に謝罪し、いっそう信仰の道に励むことを誓います。そして迷いを乗り越え、ようやく大井が、心静かに運命を受け入れる境地に達した矢先、死刑執行が告げられます。

平成21年5月より、裁判員制度が始まります。「生くる限り」の初出発表から70年近くが経過していますが、扱われているテーマは、驚くほど、現代の状況と繋がっています。司法の世界が、私たちの身近になりつつある今日こそ、一読する作品であると思います。

ところで、作品中に大井が『真宗聖典』を熱心に読みふける場面があります。岩倉の旧蔵書にもこの『真宗聖典』が含まれているのですが、それは表紙やページが外れてしまうまでに使い込まれ、岩倉による膨大な書き込みが加えられています。岩倉の御家族の方の話によると、この使い込まれてボロボロになった『真宗聖典』を僧侶の方々に見せたところ、「我々ですら、これほどまでに『真宗聖典』を使い込んではいません。この勉強熱心さには恐れ入りました」と一様に感嘆されました。この本は、岩倉が如何に深く仏教を追究していたかを物語ることができる作品といえます。

(館内奉仕係 舟山)

レファレンスあれこれ

Q . 大正時代に、総曲輪にあったという映画館「帝国館」の外観の写真を見たい。

A . 「帝国館」は、1985年（昭和60年）に閉館されるまで、長く富山市民に親しまれた映画館である。洋・邦の数々の映画が封切られ、鑑賞に足を運ばれた方も多しことだろう。明治時代に開設された当初は芝居小屋であったが、大正に入って映画が盛んになると、映画常設館に転じた。その後、火災や空襲による数回の焼失を経て、戦後再建されてからは、閉館までに数多くの映画を上映してきた。外観の写真が見たいとの質問なので、当時の総曲輪の様子がわかる資料を調査した。

『総曲輪懐古館』（巧玄舎 1977）には「明治に栄えた芝居小屋「歌舞伎座」が「第三福助座」となり、その名も「帝国座」と改めて映画館に転身したのは、大正6年6月1日の山王さん祭りの日だった。それが大正13年の4月に、映写室から火を出して全焼し、12月に再建されてから「帝国館」になった」との記述がある。

『総曲輪物語』（桂書房 2006）に空襲前の富山市中心部の地図があり、本願寺西別院の敷地内に「映画館 帝国館」があったことがわかる。当時の映画館や現在のWIZシネマについて書かれているが、写真は載っていない。（「富山映画劇場」「東洋館」「松竹館」の外観写真はあり）

『ふるさと富山歴史館』（富山新聞社 2001）にも帝国館の写真はない。『とやま映画100年』（北日本新聞社 1999）では富山初の活動写真常設館「富山電気館」が拡充のために「福助座」を買収し「帝国座」に、その後全焼により新築し「帝国館」になったことがわかる。

帝国館の写真は、大正時代の建物、昭和21年に再建された建物のいずれも見当たらなかった。

Q . 現在の県展は昭和21年から開催されているが、戦前に県展の前身となる展覧会や組織があったのか調べたい。

A . 『富山大百科事典』（北日本新聞社 1994）によると「県展」は1946年（昭和21年）に創設された本県最大規模の公募美術展。正式名称は富山県美術展覧会。富山県展は国内でも創設時期の最も早いものに属することがわかった。ただし、前身となる展覧会・組織についての記載事項はなかった。「美術展」の項目をみると、「1941年（昭和16年）に本県における最初の総合美術展ともいべき富山文化協会総合美術展が開かれている」という記述がある。

『県展の草創期に活躍した作家たち』（1995 県展50回記念展実行委員会）は「県展関連年表」として1941年（昭和16年）から1960年（昭和35年）までの県内の美術界の動きが年表でわかるようになっている。また収録されている久泉迪雄「県展、その創設前後のことども」では、大戦前後の活動の様子がうかがえる。富山県民会館美術館学芸員稲塚展子は同書のなかで県展の前身ともいえる展覧会として、富山文化協会総合美術展をあげている。この資料には 県展開催状況一覧表と受賞者一覧が昭和21年の第1回から平成7年第50回まで記載されている。

『昭和のアルバム 富山の文化往来』（1989 富山新聞社）の久泉共三によれば、第1回県展をおこなう中心となった人物は、疎開してきて富山にとどまっていた人たちと県内在住の作家たちであるそうだ。県商工課の協力もあり、第1回県展を開催できたとしている。

これらの資料から見ていくと、直接的に前身となった組織があったわけではないが、県内にある美術に関する深く熱い思いが戦前の美術展開催から戦後すぐの県展開催につながったのではないかとと思われる。

（堀川分館 山崎）

平成21年4月20日富山市立図書館 編集 発行 富山市丸の内1丁目4-50 TEL076-432-7272
HP アドレス <http://www.library.toyama.toyama.jp> E-mail lib-02@library.toyama.toyama.jp